

学校経営のポイント

“視聴率操作不祥事”を反省材料に

若井 彌一

日本テレビのプロデューサーによる視聴率操作不祥事が連日、テレビ番組で取り上げられ、実態としての視聴率向上に一役買った格好になっている。

“視聴率の数値目標化”の落とし穴

視聴率は、辞（事）典類で「テレビの番組が視聴されている程度。その地域の全受信機台数に対するその番組を受信した台数の比率を種々の方法によって推計する」（『広辞苑』）というように説明される。

表現に注意していただきたいのは、「種々の方法によって推計する」という部分である。推計とは、種々の計算方法によって、特定対象を数量的に推定することである。学問的に発展したものとして推計学があり、多様な分野・領域で利・活用されている。

視聴率に興味のあるなしは別として、視聴率%というのは、感覚的にはわかりやすい。そして、内容はともかく、視聴率は低いより高いほうが一般的には響きが良い。テレビ会社にとって、それが大きな関心事となり、最近のテレビ会社では、視聴率の向上が数値目標化される傾向があることも広く知られた事実である。今回の視聴率操作不祥事は、このような流れのなかで発生した。

会社側は、“不心得の一社員が起こした不祥事”をことさらに強調しているようであるが、不祥事や犯罪は、その「時代と社会」という大きな背景や流れの所産でもあることを軽視すべきではない。

不祥事を起こしたプロデューサー（41歳）は、同社に設けられた「視聴率操作調査委員会（委員長＝江幡修三元検事総長）」に対して、「視聴率を取れば優秀と評価される。視聴率さえ上げれば何をやってもいい感覚があった」と釈明している（11月19日付け『新潟日報』による）。視聴率向上が数値目標化され、ついには絶対目的化されてしまっていたこ

とが、率直に語られている。

数値のみに一喜一憂しない“経営と実践”を

視聴率に限ったことではないが、数値表示することは、それを見た者の理解を容易に、さらには正確にするという利点を有する。したがって、学校経営や教育（授業）実践に関する種々の事項を、可能なものについて数値表示することは決して間違っていない。

しかし、数値表示するといっても、数値表示の対象となる諸事項の内容・性質は当然のことながら多様である。そして、右上がりの数値目標を掲げることが適切であるものも、反対に不適切であるものもある。数値表示そのものが間違っているわけではないが、その意味づけをよく考えないで、数値目標がひとり歩きするような事態は避けなくてはならない。

保護者や地域住民に対して、学校の経営や教育実践について、数値表示を効果的に活用していくことも有益である。しかし、その場合、表示された数字に盛り込まれている学校経営と教育実践、児童・生徒の学習活動の豊かな内容を添えて説明することが肝心である。

「なにが数値表示でき、なにを数値表示すべきか」「数値目標化でき、または数値目標化すべきものは何か」「数値目標化にふさわしくないものは何か」等について、今回のテレビ視聴率操作不祥事を対岸の火事として傍観することなく、“わが校”でも類似の不祥事を招かないための反省材料として、校内研修等で検討していただきたい。

（わかい・やいち＝上越教育大学教授）

お詫びと訂正 前号中、『バカの壁』の著者名が〔養老猛司〕とあるのは〔養老孟司〕の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

●新刊案内●

読本シリーズ最新刊・大好評発売中！

教育開発研究所刊

教職研修総合特集 No.159 【編集】高階玲治 / A5判 220頁・定価 2310円

『2学期制の学校経営《導入と展開》』

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください（24時間受付・即日発送）